

まはこよ 壇はま 研よ 俳歴

春眠

竹村 清繁

傘寿まで生かされてみて日向ぼこ

春眠に夜来の風雨収まりぬ

まほろばの空に三山霞みけり

翼より長き巢藁を唾へゆく

歳月の花の重さの滝さくら

雑詠

内山 昇

大利根の逆白波や雪解どき

目路はるか谷川<sup>たにがわ</sup>岳白し初ざくら

やはらかき利根の川風落の墓

空濛の崩るるまに雪柳

野佛の肩に木漏れ日竹の秋

春

藤盛 詔子

犬ふぐり水辺彩る遊歩道

柳の芽触れて確かむうすみどり

沈丁の匂ふ夜道の道標

おぼろ月老ひゆくことにまだ馴れず

つましく生きたる妣や水温む

春の雪

高島 治

朝粥の陽の出づること寒卵

良き日とは凡の日々なり春の海

強東風に絵馬の駆け出す蹄の音

身を任せ風と遊びし春柳

龍安寺一石隠す春の雪

冬を詠む

谷川 操一

救急車をわんわん泣かせ十二月

忘年会先ず黙禱をして始む

縄文の先人たどる冬銀河

生きてこそ晩成もある竜の玉

春を待つ鶯中天に輪を描き

春模様

竹内 章二

花仰ぎ旅立ちの朝晴れわたる

春ゴルフ息子と初の二人連れ

老妻の白きうなじや春の宵

風さそふ花に名残りの人ありき

為す事の覚悟問はれし春の雪

# 壇はま よこはま 歌研 歴

高野賢彦

週一の妻不在時の昼下がりに食いしん坊は何を食べはる  
夕暮れの山の端の月われを呼ぶ風強ければお助けあれと  
山月は麗しければなおのことハシゴ架けても行かんと  
思ふ  
兩戸あけ梅の古木を眺めつつ花信はいかにと思ふこのころ  
春暁のはるかに霞む西の空おもえど見えぬ甲斐駒ヶ岳  
青春の日々を語れぬ寂しきや友はすくなく故里遠し  
春ランは里の疎林に生えてこそ姿かたちも愛らしきかな

市川康夫

三日月のかかるにしぞら青深み一番星はかがやき増せり  
をとめこの清しさに似ぬ街の音うしる姿は急ぎ過ぎ行く  
観覧車みなどみらいに色を添へ時刻むなか苦吟し立てり  
流れゆく世の営みの点々と秋の車窓の夜は更けにけり  
庭先のさくらおちばの転がるをこよひ聴きつつ酒は爛かな  
つくづくと老人たるの自覚もち旧き習ひの餅は怖しと  
新年の輪かぎりのみのマンションは孫ら訪れにぎはひ増せり

山本修司

残照の大仙陵は影おとし深い緑にいにしえおも  
補陀落の観音様に会いに行く棺桶船の影は悲しく  
ドッコイシヨもとを辿ると六根清浄思わず声出し背筋が伸びる  
年毎の同窓会の談笑は沖行く船のあとの白波  
年ごとにゆるむ涙腺火垂る墓ティッシュの箱をとりあう二人  
三溪園折れた梅枝大風で大輪菊に命を宿す  
大洪水最後の言葉「長いこと世話になったな」全国涙



# 壇はま よこ 研歴 詩

## 涙のパヴァーヌ

丹下重明

遠いルネサンスの香りにみちた

リユートの音(ね)

ただよう哀しみのひと時

ジョン・ダウランド

「涙のパヴァーヌ」

それは

カラヴァッジョの描く

「リユートを弾く若者」

けだるい愁いにみちた瞳

そのたおやかな指先から

哀しみは

花びらとなって舞い散り

やがて遠い海に

ひっそりとただよう

甘やかなリユートの音(ね)の

夢の残り香

ラクリーマ・パヴァーヌ

ため息の終り

## 麗しき弥生三月

高野賢彦

国破れても草木が萌え出(いず)る季節

道端には踏まれても一向にへこたれない

黄色いタンポポが咲き乱れ

土手にはムラサキのスミレ草がひそかに咲き

風に吹かれてかすかに揺れている

それぞれの花言葉は

「愛の信託」と「真実の愛」だ

僕は昔から黄色が好きなので

明るく晴れやかなタンポポを愛する

また

枕木が敷かれている里山の赤茶けた馬車道の草むらに

スミレ草を見つけると

「あ スミレの花だ」と叫ばずにいられない

愛らしい小さな紫色に歓喜して

じつと見つめている田舎育ちの僕の姿は

いまでも変わらない

英単語マーチの頭文字を大文字にすると「三月」だ

それは卒業、なにかを新しく始める月でもある

小文字のマーチは「行進・前進」だ

コメンメントは「卒業・開始」の意味

大文字でも小文字でもみんな同じだ

それにしても「弥生」とはなんと意味深長な

美しい言葉であろうか

みどり萌え出でて花々が咲き乱れる季節

春は進むことが大事だ

麗しき弥生三月よ